

企画展 開催中！「レディ サムライ直虎」 8/1～11/27**～漫画とイラストで見る浜松歴史秘話～**

来年放映される大河ドラマの主人公「井伊直虎」について、直虎が女性であることはかなりの方がご存じだと思います。その形容も女城主など色々な名称で表されています。この浜松文芸館では、直虎公を「レディ サムライ」と称し、今回の企画展で取り上げてみました。愛と勇気の心をもって、井伊家存続のために力を尽くした直虎公の姿を、漫画家・江川直美氏の作品を中心に

展示してあります。謎多き直虎公ですが、調べてみると周辺のゆかりの地には、直虎公に関連する様々な史実が浮かび上がってきます。それらをゆかりの地の物語として「寺野編」「井平編」（江川直美氏・柴田宏祐氏作）と題し漫画で表してみました。10月には、川名編物語が完成します。楽しみにお待ちください。

今回の展示を通じ、井伊直虎公の人物像や生き方、直虎公を取り巻く人々の姿に思いを馳せていただけたら幸いです。また、直虎公が生き抜いた戦国時代の浜松を知ることは、これからの浜松の姿を考えるよい機会にもなると思います。

子供から大人まで楽しめる分かりやすい展示です。どうぞ、ごゆっくり観覧ください。

**館長のひとり言・・・オリンピックに思う**

開幕前は、今ひとつ関心が薄かった今回のリオオリンピック。ふたを開けてみると、日本人選手の大活躍に、大感激の毎日。明日の仕事も顧みず、つい、真夜中から早朝までテレビに釘付けの日々を送っていました。この17日間、選手の演技や奮闘ぶりに声を張り上げ拳をにぎり、まるで自分も一緒になって戦っているかのような気持ちになったものです。それにしても、戦いが終わって流す選手の涙は美しかった……。化粧つ気もなく素顔をさらし、髪を振り乱して戦い抜いたアスリートたちは輝いていました。その涙や輝きの裏側にあるものは、選手曰く「誰よりもたくさん練習してきた！多くの人たちに支えられてここまでこられた！」という努力に裏付けされた自信と誇り、そして、感謝の気持ちでしょうか。たくさんの感動をもらい、その瞬間を共有できたことは、私たちの宝です。あきらめない、最後まで取り組むことの大切さを教えてもらったことも。それこそ、スポーツのもつ力です。この夏、確かに変わった自分があるような気がします。そして、忘れてはならないのは、このスポーツと同じように、文学にも人を変える力があるということです。それを検証していくのもこの浜松文芸館の役目です。言葉の力をもってして人々に感動を与えられる浜松文芸館にしたいと思います。

浜松文学紀行 湖畔の詩人 清水みのる 3

村 一 番 の 腕 白 坊 主

浜松文芸館講演会 講師 和久田 雅之

後年清水みのるは、「僕は湖郷、浜名湖のほとりで生まれ、育った事をどんなに幸福に思っているか知れない。若し僕が浜名湖畔で生まれなかったら、『ふるさとの燈台』も『かよい船』も『ふるさとの湖』もその他一連の湖畔、船ものもこれほどには作れなかったであろう」と書いている。詩人としての、人としての清水みのるの原点は、まさに浜名湖と川のほとりのここ伊左地にあると思われる。みのるには、50代に入って書いた「思い出の記」という文章がある。

村の、呑気で頑固な医者の子坊主として生れた私は父の性格から野性的な血を享け、内気で反面コウショウな母から、同じ様な剛情さと涙もろさの性格を植えつけられたらしく、小学校の頃は全く手に負えないやんちゃ坊主であった。

小学校当時みのるは、「悪童三羽ガラス」とか、水泳が得意だったので「伊左地川の河童」の異名をとっていたようだ。昭和50年（1975）当時、伊左地町の生家で書道塾を経営していた兄の貫一さん（75歳）は、当時を振り返って

みのるの腕白ぶりは、近所でも有名でした。夕食の時など、「今日はみのるがどんないたずらをした」という話題で話が尽きなかったものです。（「東海展望」1975）

と。みのるが「腕白坊主」の名を決定づけた事件が、4年生の時に起きた。鉄棒から手を滑らせて右手足が不自由になってしまった兄貫一と連れだって、家の近くの入り江で泳いでいた時、一緒に泳いでいた兄の同級生が兄の泳ぎぶりを見て、岸で魚取りに夢中になっていたみのるの眼を盗んで兄を溺れさせたのである。バチャバチャ、キャツキャ騒いでいたのが、急に静かになったので振り返ったみのるの眼に飛び込んできたのは、兄の同級生が兄にラムネを飲ませているではないか。当時伊左地では、溺れさせることをこのように言っていた。そのくらい悪童仲間のあいだでは、このようないたずらがしょっちゅう行われていたのだろう。みのるは不自由な手足でもがいている兄を見て慄然とし、猛然と兄をいじめている上級生に躍りかかっていった。

どの位、水中格闘をやったか覚えがない。四年生とは言え、後に浜中、立教大学の水泳部の主将にもなった私であって見れば、その頃はもう水泳にかけては天才的なものがあつたのに違いない。

完全に六年生のサムライに浜名湖のラムネを腹いっぱい飲ませ、その少年の泣き騒ぐのをあとにして、兄と意気揚々とわが家に引き揚げて来たのである。（「思い出の記」）

翌日、受け持ちのラッキョウと呼ばれ校庭に連れていかれた。「きのう上級生にラムネを呑ませたというのが本当か、彼は熱を出して休んでいるぞ。死んだらどうするッ」と、青筋を立ててかんかんになって怒った受け持ちは、みのるの襟首をつかんで井戸の傍まで引きずっていった。「さあ、ここへ入らんか。入って人の痛みを味わってみろ」と怒鳴った。

謝っても許してもらえそうもない先生の剣幕であるである。自分がなぜこれほど怒られるのかわからなかった。兄の仇を討ただけなのにと考えた。（続きは次号）